九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

Anti-tumor necrosis factor therapy decreases the risk of initial intestinal surgery after diagnosis of Crohn's disease of inflammatory type

永田, 豊

https://hdl.handle.net/2324/2236102

出版情報：Kyushu University, 2018, 博士（医学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (2)

氏　　名：永田　豊

論 文 名：Anti-tumor necrosis factor therapy decreases the risk of initial intestinal surgery after diagnosis of Crohn’s disease of inflammatory type

（抗 TNF 製剤治療は炎症型クローン病患者において初回手術を減少させる　）

区　　分：甲

論　文　内　容　の　要　旨

背景：抗 TNF 製剤による治療はクローン病（以下、CD）患者を臨床的な寛解状態へと導き、また維持投与を行うことで寛解状態を維持できることが報告されている。しかし抗 TNF 製剤の CD 自然史への影響については議論の余地がある。本検討では抗 TNF 製剤が CD の初回腸管手術に与えた影響について研究を行った。
方法：単施設後ろ向きコホート研究を行った。1973 年から 2014 年までに九州大学病院で腸管合併症のない炎症型 CD と診断された 199 例の CD 患者の経過を 2016 年末まで詳細に観察した。経過中の抗 TNF 製剤の投与状況で TNF 群、non-TNF 群の 2 群へと分類した。2 群間の臨床的特徴、及び CD に対する治療について比較検討し、結果を元に共変量として傾向スコアを算出した。傾向スコアで調節したコックス比例ハザードモデルを用いて抗 TNF 製剤治療が CD 関連の腸管手術に与えた影響を検討した。TNF 群においては免疫調節剤の併用が腸管手術に与えた影響についてサブ解析を行った。
結果：検討期間中 108 例が抗 TNF 製剤治療を導入されていた。TNF 群症例は non-TNF 群症例と比較して診断時期が近年に近く、小腸病変を有さない大腸に限局した病型、肛門病変を有している例が多かった。累積腸管手術率は TNF 群が有意に低く（$P < 0.0001$）、抗 TNF 製剤治療の腸管手術に対するハザード比は 0.32（95%信頼区間、0.13-0.74）であった。TNF 群におけるサブ解析で免疫調節剤の併用は初回腸管手術を低下させる因子としては抽出されなかった。
結論：抗 TNF 製剤による治療は炎症型と診断された CD 患者において腸管手術を減少させる因子として抽出された。免疫調節剤の腸管手術における上乗せ効果については更なる検討が必要と考えられた。